

ドイツ文学 (ドイツ文学)

1 年次 前学期	授業科目責任者：渡邊 徳明 (教養学 ドイツ語)
----------	--------------------------

学習の目標 (GIO)	<p>[目標] おもにドイツ文学の作品の抜粋を読みながら、ヨーロッパの文学の特徴とは何であるうか、ということについて考え、認識を深める。とりわけ常に「人」と向き合わねばならない医療人は、人を生物学的な存在である「人体」としてのみではなく、文化的存在である「身体」として深く理解し、その尊厳の維持に注意を払わねばならない。その観点からも、本講義では、ヨーロッパ文化における身体イメージの重要性を常に強調してゆきたい。</p> <p>[本年度のテーマ] ドイツ文学における「愛と死」</p> <p>[テーマの解説] 医療人にとって、死は肉体の有機的活動の終了であり、すなわち無機的存在への移行を意味しよう。その意味で死は「無意味」への移行である。ヨーロッパ文学の伝統にあつては、その「無意味」なる死においてこそ、しばしば愛が完成する。そのため、恋人への想いの強さが表現される場面で、しばしば人物は死へと突き進む。</p> <p>死の瞬間に精神が最も純化する、という考えについては、たとえば焔に飛び込む蛾を見て「死して成れ」と呼びかける有名なゲーテの詩までも連想されよう。それは生の最後の瞬間に向かって精神を完成させて行こうという思想家の意志であり、至高の存在への愛が見え隠れする。</p> <p>肉体的に「無意味」に化す変化に際し、精神的に最大値の「意味」が付与される、という点は医療人の目から見れば矛盾の極みだが、それが文学の世界の価値観であるとも言える。死は生物学的な人体にとって無意味への移行であるが、文化的な身体にとっては最高度の象徴性を付与する変化(あるいは行為)とも言えるからである。特にキリスト教文化圏において、その傾向は強いと言えよう。</p>
授業担当者	ドイツ語 渡邊徳明
教科書	特に指定しません。授業時にプリントを配布します。
参考図書	授業時に適宜紹介します。
実習器材	特にありません。
評価方法 (EV)	定期試験は実施しません。授業での参加状況などによる平常点 (60 パーセント)、最終レポート (40 パーセント) にて評価します。レポートは授業で扱った作品、もしくは担当教員が推薦する授業関連の作品を一つ選択して、それを読んで内容要約と感想を書いてもらおう、というものを求めます。
学生へのメッセージ オフィスアワー	出席を重視します。文学や歴史についての予備知識は特に求めません。適宜、画像や映像なども取り入れ視覚的・聴覚的にヨーロッパ文化に親しんでもらえればと思います。またこの授業を通じて、一冊で良いですから気に入った文学作品を見つけてもらえればと思います。知識の習得よりも、文学作品をどのように鑑賞するか、という方法・態度をみんなで考えてゆく、という授業にしたいと思っています。なお、授業前にシラバスをよく読んでおいてください。

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略 (SBOs) (LS)・準備学習 (予習) 内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
4月9日 (火)	講義テーマの解説	<p>[準備学習項目] シラバスを読んで、「愛とは何か」「死とは何か」という問題について自分なりにイメージを育てておく。</p> <p>[授業内容] 動物と人間を分ける一つの目安として文化を有するかどうか、象徴性を理解するかどうか、という点がある。愛がなくても人間は子孫を残すことができるかもしれないが、それは単に動物レベルの生殖行為に過ぎない。愛とは肉欲を包含するが、それ以上の観念的側面を持つ。すなわち文化的な現象である。</p> <p>それは死についても言えよう。死を単なる肉体的変化としてしか捉えないのであれば、その人は人間性を喪失していると言える。死を文化的現象・象徴的な出来事と理解して初めて人間らしい人間となる。いわゆる旧人 (古代型ホモ = サピエンス) には死体を埋葬する習慣があったとされるが、そこから彼らが既に「文化的人間」の範疇に分類される資格を有していた、とも言えるのかもしれない。</p>	渡邊徳明

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略(SBOs)(LS)・準備学習(予習)内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
4月16日(火)	形而上の愛と形而下の愛	<p>[準備学習項目] プラトン「饗宴」の抜粋を読む。</p> <p>[授業内容]</p> <p>「愛」については古代ギリシャにおいて、形而下的(即物的・肉体的)なレベルと形而上的(抽象的)なレベルが存在することが議論されていた。たとえばプラトンの著書では、人間は不変なるものを愛する傾向があり、愛の究極的な様態とは、個々の人や物などいずれ変化する対象に対する愛ではなく、不変な存在への愛、たとえば知への愛である、ということが述べられている。中世キリスト教世界において、至高の存在は神となり、究極の愛は神への愛となるが、やがてその対象は移ってゆく。異性が愛の対象として据えられ、手の届かない異性への愛が、観念的に謳われるようになってゆくのである。</p>	同上
4月23日(火)	「ニーベルンゲンの歌」のクリエムヒルト像	<p>[準備学習項目] 「ニーベルンゲンの歌」の梗概について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容]</p> <p>13世紀初頭に書かれた「ニーベルンゲンの歌」はブルグント族の王女クリエムヒルトの一代記である。彼女は最愛の夫ジーフリトを英雄ハゲネに暗殺され、未亡人として泣き暮れる日々を送る。やがてフン族のエッツェル王(実在のアッチラ王がモデル)と再婚した彼女は、ジーフリトを殺したハゲネと更には自らの兄までをも殺害し、自らも首をはねられる。</p> <p>この回では、この悲劇の貴婦人クリエヒルトの描写について詳しく考察してみたい。</p>	同上
5月7日(火)	ミンネザングの世界(1)	<p>[準備学習項目]</p> <p>ミンネザング(恋愛歌謡)について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容]</p> <p>12、13世紀の宮廷では恋愛歌謡が楽しまれた。その多くは、胸が苦しくなるような不倫の恋、かなわぬ恋の歌である。実際の宮廷社会では、不倫は厳罰に処せられた。またキリスト教が支配していた同時代の社会において、それまで以前には伝統的に男女の愛は否定されてきた。神への愛、形而上的な存在への愛は許容されたが、肉体的な愛は許容され難かったのである。そのような背景を踏まえてこれらの恋愛歌謡を読むとき、我が国の平安貴族が別れを惜しみつつ夜明けに詠んだ後朝の歌とはまた趣を異にする、命をかけた愛の世界が詠まれていることが分かる。</p>	同上
5月14日(火)	ミンネザングの世(2)	<p>[準備学習項目]</p> <p>ミンネザング(恋愛歌謡)について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容]</p> <p>13世紀初頭のミンネザングの詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの詩を鑑賞する。彼は当時の恋愛歌謡の世界に革新を起こした人物であり、そのみずみずしい表現は近代のドイツの詩人ゲーテとも比せられる。合わせてゲーテの詩も数編紹介したい。</p>	同上

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略(SBOs)(LS)・準備学習(予習)内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
5月21日(火)	「トリスタン」(ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク)	<p>[準備学習項目]</p> <p>ゴットフリート「トリスタン」の梗概について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] ワーグナーの歌劇でも有名なトリスタンとイゾルデの恋物語についてこの回では扱う。宮廷の重臣トリスタンは、彼自らの叔父であり主君であるマルケ王に嫁くことが決まっているイゾルデ姫と婚礼前に関係をもってしまい、それ以降離れることができない仲になってしまう。この重臣と王妃の不倫という宮廷社会を揺るがしかねない事件は、やがて二人の人生を悲劇的結末へと導いてゆく。</p> <p>この作品はアーサー王物語と同じように長大な叙事詩であるが、そこに描かれる騎士トリスタンの姿は、騎士道を追い求めて正道をひた走るアーサー王の円卓の騎士たちとは異なり、夜陰に身を隠し人目を盗んで主君の妻と逢瀬を楽しむ、やがてその宮廷での地位をも捨て去る愛の求道者の姿である。</p> <p>この恋愛至上主義とも呼べそうなトリスタンとイゾルデの恋は、のちのヨーロッパ文学に大きな影響を与えるのである。</p>	同上
5月28日(火)	「トリスタンとイゾルデ」(リヒャルト・ワーグナー)	<p>[準備学習項目]</p> <p>前回の「トリスタン」についての資料を読んでおく。</p> <p>[授業内容] 13世紀初頭のドイツで花開いた宮廷文学の名作群は、やがて19世紀後半になりワーグナーによって歌劇の形を与えられ、世界的に知られるに至った。今回の授業では歌劇「トリスタンとイゾルデ」を鑑賞し、中世の物語と比較して、どのような演出上の工夫がなされているか、といった問題について考えたい。</p>	同上
6月4日(火)	「トリスタン」の時代の現実の愛	<p>[準備学習項目] アベラールとエロイズの往復書簡についての事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 前回あつかった「トリスタンとイゾルデ」に描かれた恋愛至上主義の世界のモデルを、もし中世のヨーロッパにおいて求めるとすれば、おそらくフランスで活躍した哲学者アベラールと恋人エロイズの恋愛を挙げるのが良からう。</p> <p>彼らは教師と教え子という禁断の仲でありながら肉体関係を持ち、アベラールは制裁を受けて男性として身体の欠損に苦しむことになるが、中世ヨーロッパ神学界の最高峰の一人に挙げられる存在となる。高名なアベラールと女子修道院長となったエロイズとの間に交わされた書簡は、特に女性側の赤裸々な感情表現によって特筆に値すると言えよう。</p> <p>12世紀のヨーロッパにおける恋愛の究極的な形を体現しており、「トリスタンとイゾルデ」同様にのちのヨーロッパ人の恋愛観に大きな影響を与えたものである。</p>	同上
6月11日(火)	「ロミオとジュリエット」(英・シェイクスピア)	<p>[準備学習項目] バロック期の文化に関する事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 既に扱った中世ヨーロッパの『トリスタン』は宮廷社会においては結ばれることが許されぬ恋人同士を描いており、愛と死は一つの連想の中に結ばれている。二人の愛を妨げるものは物質的な世界における制約であり、必然的にそういった現実世界から逃避して愛を貫こうとするとき、愛は精神の国、すなわち死の世界を目指さざるを得なくなる。そのような意味では16世紀イギリスのシェイクスピアによる『ロミオとジュリエット』もまた同じ系譜上にあると言えよう。中世文学のように神の存在が常に意識される世界ではなく、かといって後の時代の文学のように人間の内面を第一のテーマとして分析し叙述してゆくのもない。中世的な神の世界と近代的な人間の自我の世界の狭間の時期の作品であり、今日の人間から見ればある種のアンバランスが感じられる。この作品の展開の不自然なまでの速さ、人物の行動の極端さは、そのような時代のアンバランスを背景に置くと理解しやすいのではないか。</p>	同上

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略(SBOs)(LS)・準備学習(予習)内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
6月18日(火)	『オセロ』(英・シェイクスピア)	<p>[準備学習項目] 『オセロ』の抜粋を事前に読んでくる。</p> <p>[授業内容] 『トリスタン』では、トリスタンとイゾルデが恋に落ちて後、そのストーリーの大部分が主君であるマルケ王の目を盗んでこの恋人同士が密通しあう次第が描かれるのであり、この恋人たちをしばしば危機に陥れるのがマルケ王の側近たちである。これら側近たちはマルケ王に甥であるトリスタンと妃であるイゾルデが通じているのだと何度も密告し、罾をしかけて二人の仲を暴こうとする。マルケ王は二人への愛と猜疑心に苦しみぬく。</p> <p>このような嫉妬より生ずる誹謗中傷と宮廷的陰謀は後の時代の文学作品にも見られるが、今回はシェイクスピアの『オセロ』を扱う。嫉妬に燃えた部下イアーゴの陰謀により自らの妻に対して猜疑心を抱いて彼女を殺してしまう将軍オセロは、直後に自らの誤りを知り、絶望して自殺する。愛・嫉妬・陰謀・猜疑心・死、というモチーフはここでも物語の主要構成要素を成している。</p>	同上
6月25日(火)	『若きウェルテルの悩み』(ゲーテ)(1)	<p>[準備学習項目] 18世紀後半ドイツの社会的・文化的環境について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 以前に扱ったゴットフリートの『トリスタン』や、前回扱ったシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』では、それぞれ宮廷社会における秩序や家同士の間の対立という外的条件によって愛を遂行することが困難となった。このような現実世界の束縛から解放されて愛が成就するのは純粋な精神の世界のみであり、両作品においてそれは死の世界でもある。18世紀後半にゲーテが書いた『若きウェルテルの悩み』においてはそのような厳格な社会的制約が主人公の愛の遂行を困難にしたわけではないが、しかし友人の婚約者への想いがつり、また旧態依然とした貴族制社会の中で才能を思うように発揮できず孤独感を深めやがて死を選択する主人公ウェルテルもまた、物質的な現実世界の壁を乗り越えられず、その束縛の解放を求め精神の国への希求を強め、最後に自ら命を絶つ。その意味ではこの『ウェルテル』を上述の二作品と同系譜上に論ずることもあるいは可能なのではないか。</p>	同上
7月2日(火)	『若きウェルテルの悩み』(ゲーテ)(2)	<p>[準備学習項目] 『若きウェルテルの悩み』の抜粋を読んでおく。</p> <p>[授業内容] 前回に引き続き、『若きウェルテルの悩み』を読む。主人公は、同時代の因習・社会常識に強く反発し、自分の内面に引きこもってゆく。自分の死を想像し、更にそれを悲しむ「恋人」ロッテの姿を想像して恍惚とする。自分の感性と主観的世界に対する強烈な自負心から、周囲に容れられずに死にゆくことは、むしろ天才としての宿命であるとして、自ら好んで死へと向かうのだとも言えよう。神でもなく王でもなく、自らの理性と感性のみに従うのであり、その意味で、近代のドイツ文学がこの作品をもって始まったと言っても過言ではない。</p> <p>当時のヨーロッパではまさに近代が始まるうとしていたのであり、この作品の生まれた直後の時代には、たとえばアメリカ独立革命やフランス革命、ナポレオンの台頭などの政治的な大事件が起きてゆく。政治的には英仏に比べて後進国であったドイツでも、思想的にはカント、フィヒテら哲学者が近代的な哲学を展開してゆく。これら同時代の政治的・思想的背景を踏まえる時、『若きウェルテルの悩み』が単なる女々しい男性の物語ではないことが理解できよう。</p>	同上
7月9日(火)	愛についての心理学 体と心をつなぐもの (1)	<p>[事前学習項目] ラッツェル・ベイカー著、宮城音弥訳『フロイト』(講談社現代新書)の抜粋を読む。</p> <p>[授業内容]</p> <p>19世紀末から20世紀の前半にフロイトは解剖学的には原因が見いだせない精神のさまざまな病的症状を、性的なエネルギーの観点から解明しようとした。彼の学説以降、人間の精神の形成および障害という目に見えない範疇のものが、エネルギー保存の法則の概念を援用して説明されることになる。</p> <p>その是非は別として、彼の学説以降、愛についての問題も、それなりの「科学的」裏付けをもって論じようという流れが出来上がってゆく。特に、人間の無意識の世界についての議論が展開されていった。</p>	同上

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略(SBOs)(LS)・準備学習(予習)内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
7月16日(火)	愛についての心理学 体と心をつなぐもの (2)	<p>[事前学習項目] 河合隼雄著「無意識の構造」(中公新書)の抜粋を読む。</p> <p>[授業内容] フロイトの影響を受けながら、後に独自の道を歩み、人間の無意識の世界の解明とその文化的意義についての考察を進め画期的な業績を残したユングの心理学についての概略を、河合隼雄の著書の抜粋をもとに学ぶ。</p>	同上
9月10日(火)	前期のまとめ	<p>[準備学習項目] 前期の授業で配布した資料を読み、疑問点をメモしておく。</p> <p>[授業内容] 前期の講義内容のまとめ</p>	同上